

やまとの名品 天理図書館



けいししゅうせつ ほうかつしほん
經史集說 翰活字版

編者未詳

15卷5冊 朝鮮18世紀刊

縦24.2cm 横15cm

朝鮮において十八世紀に経書や史書等から重要な語句を集めた書。匏活字とは朝鮮後期にパカジ（瓢箪の一種）の表皮に彫った活字とされるが、慶尚道地域の儒学生の間で製作されたという口伝と、活字の一部が日本に伝存する説以外は不詳である。掲出本は今西龍旧蔵本では「陶活字本」とある一方、『古刊朝鮮本』に「陶活字たる證左になるべきものはない。尚、後考を俟つ」等とあり伝存稀な珍本の一つといえる。

旧蔵印は「賜貫唐城」「洪天普氏藏印」で賜貫とは王が功臣等に特別に与える本貫（居住地）を意味し、唐城とは現在の京畿

道華城郡の地域で、後の南陽洪氏のゆかりの地である。洪天普は朝鮮太祖（即位一三九二〜一三九八年）の娘淑慎翁主の婿であった。洪海の後孫で英祖年間（一七二四〜一七七六年）に活躍した。『英祖実録』巻六十四の英祖二十二年七月にも洪氏家蔵の「太祖大王御筆」と「肅廟手書」を閲覧した記事がある。

この中の「太祖大王御筆」とは娘淑慎翁主に与えた土地家屋の所有権を明記した文書であるが、朝鮮王朝の親筆自体が伝存稀で後の王英祖が関心を持ち目にしたのであろうか。その文書の末尾には「本文記を併せ許與



『英祖実録』巻六十四

し永々居住せしむ、若し後日事故ある時は本文記内の事を以て官に告げて辯別し、子孫相傳永遠に居住すべきものなり」と所有の許しを意味する一文がある。太祖の気概を著した親筆は洪海から三百数十年間襲蔵される。それは正にこの珍本にみられる洪天普の旧蔵印が物語っていて感慨はひとしおである。

（天理図書館 南田尚紀）